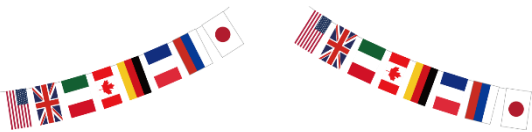


スポーツおじいさんにないたい！④



『リベンジ・マッチ』

國友万裕



1. 真っ暗闇のミーティング

この12月頃だったと思う。

教え子から突然メッセージが来て、「先生、明日イベントするから来てください」というのだ。

俺はできる限り、若さを保つために、学園祭など学生から誘われたイベントにはいつている。しかし、今回のイベントは普通のやつとはちょっと違うみたいで、料金も学生が主催するものとしてはやや高めである。

でも、日曜日で、時間はあるし、行った方がいいかと思った。俺は若々しい、スポーツおじいさんになりたいと思っているからということもあるが、若い子のことを知っておかなくてはならないという気持ちが強いのである。そうしなければ、若い子の感覚についていかれず、授業評価のアンケートでとんでもないことを書かれたりもする。

今はどんどん世の中の意識が変わっている。つい数年前まで許されていたことが、今となっては許されなくなっている。コンプライアンスと多様性、スマホとSNS、今の子達の意識は昔に比べて大きく進化しているのだ。それにある程度はついていく、心の準備をしておかなくてはならないのである。

俺は、いざ、そのイベントへと出かけた。何も知らずに行ったのだが、奇妙なイベントだった。

まず、会場が真っ暗闇で、しかも、スタッフが何も見えない中を、参加者の人を引っ張って行って、座席もバラバラに座らされる。誰が来ているのかも、わからない。真っ暗闇の世界なのである。

俺が一番年上であることは確かみたいだったが、年齢や職業も様々で、おそらく若い

子が多いのだろうけど、お互い知り合いでもない人たちが同じテーブルに座らされる。幾つテーブルがあったのかもよくわからない。参加者の人、1人とも顔を合わせることがない。真っ暗なので、隣の人の顔すら見えない。手元にあるスイーツと飲み物しか見えないのである。

そして、そこで、お互いに与えられたテーマについて話をしていくのである。1テーブルにつき6人くらいである。俺と同じテーブルだった人は、中国からの留学生と思われる人が2人ほどいて、水泳のインストラクターの若い男性、それから日本人で若い社会人の女性もいるみたいだった。1時間少しくらい話しただろうか。

真っ暗闇の中のミーティングである。しかも、外に出る時も、1人ずつ、スタッフに引っ張られて別々に出ていくことになるため、話した人、同じテーブルにいた人の顔はわからないまま、ミーティングは終わっていったのだった。あのテーブルで話した人たちとは、これから先どこかで会ったにしても、誰だかわからないままということになるだろう。

面白いイベントを考えつくものだったものだった。イベント研究会みたいなやつなのだろうか。とはいうものの、これはマッチョの構築とは何ら関係ない。若さの構築。若い子の中に混じれたという経験の1コマであった。

おそらく、今の若い子はこういう匿名性のイベントが好きなのかもしれない。インスタグラムを見ている、まったくの匿名の子が多いのである。Facebook だったら、本名でやっているのが基本だし、プロフィール写真は自分の顔写真を使う人がほとん

どだ。ところが、その後に出てきたInstagramは、名前も誰だかわからない名前、プロフィール写真は後ろ姿というケースが多く、誰のアカウントなのか全然わからない。あんなので、誰の写真なのかわかるの？と訊くと、「わからない時もあるけど、誰かやろなあと思いながら見ている」と言われたことがあった。

今の若い子は裏アカをもっているらしくて、恋人との写真だとか、ごくプライベートな写真は裏アカの方に出すらしい。その一方で、「僕はできる限り、SNSはしたくないんです。だからラインしかやっていません」と言っている子もたくさんいる。今の子は物心着く頃からSNSの時代を生きているので、そういうのはうんざりと思っている子もいるのだそうだ。

みんなインスタでは楽しそうにしているように見えるけれど、「暗いときの写真なんかをSNSに載せるわけじゃないじゃないですか」と言われたこともあった。悩んでいる時の写真は、それこそ裏アカとかにしかださないのでだろう。

今回のイベントは真っ暗闇だからインスタ映えするような写真も撮れない。でも、そこが斬新なところだったのだと思う。とにかく、変わった経験をさせていただいた。楽しい、不思議な思い出ができたのだった。

2. ジムでの忘年会

12月は、ジムでの忘年会もあった。ボクシングジムなので、マッチョな男が大勢集まる。鍋など、いかにも男っぽい豪快な料理を他の男たちと囲んだ。ここでも俺は最年長である。

腕相撲大会も行われた。腕相撲は絶対に一発で負けるという自信があったが、これはお遊びだから、一瞬の恥は仕方がない。

俺が対戦することになったのは、俺より一つ年下の滋賀の高校の先生である。

「先生同士の対決だ!!!」とジムの仲間から声がかかった。

案の定、俺は一瞬にして負けてしまった。

この先生はジムで時々顔を合わせるが、いかにも温厚な良さそうな人。高校の先生にはこういう人いるなあと思わせるような人だ。若い頃はサッカーをやっていて、その後、柔道もやって、そして今はボクシングと言っていた。おそらく、奥さんや子供もいるだろう。最初はサラリーマンだったのが、高校の先生になって、工業高校で国語を教えているとのことである。進学校ではないらしいのだが、生徒は皆いい子ばかりで、就職もいいところに決まっていくと言っていた。

このおじさんのような人生が一番いいんだろうなあ俺は思う。普通に生きて、普通に生活して、スポーツするのを趣味にして、平凡に歳を重ねていく。そういう人生に満足できる人が一番幸せなのだ。

しかし、俺は若い頃のトラウマのせいで、女性とつきあえず、平凡な男になることに対する激しい抵抗があった。高校に3日しかいかれなかったのだ。そんな俺が、普通の人生を歩むことなんてできるわけがないのである。

俺はボクシングのジムでは、目一杯男っぽくいたいと思っているので、すぐに上裸になる。前に俺が教え子相手に上半身裸でフックの練習をしていたら、「先生、裸で(笑)」とこの高校の先生から笑われたことがあった。

「男ばかりだからいいじゃないですか。俺だって、たまには上半身裸になってマッチョな気分を味わいたいですよ笑」

そんなわけで、忘年会では、マッチョな男たちの一員となり、12月も過ぎて行ったのだった。

3. 従弟の死

正月になって、帰省する予定はなかったのに、ふと思いついて2日から2日間だけ家に帰った。年老いた母と弟に会うためである。母はもうすぐ87歳だが、きわめて元気である。この分だと100まで生きる可能性だってある。

それにこの頃弟が50過ぎて、仕事を変えようかと迷っているため、ここで母に死なれたら弟の転職が上手くいなくなるだろう。母の兄もまだ生きているし、妹2人も行きている。つい先日、一番下の妹の息子が死んだ。57歳だった。

思えば、可哀想な人生を歩んだ子だった。彼のお母さん(俺にとってのおばさん)は、できちゃった婚の走りだった。今は授かり婚なんていくらでもあるが、57年前だ。周りは腰を抜かすような状況だったらしい。しかし、叔母は自由奔放な人だったので、世間の常識なんて全く気にしなかった。

叔母はダメ男好きの女性で、結局、2回結婚しているのだが、2回ともヒモみたいな男の人だったのである。叔母さんはそういう男を養ってあげているのが好きなんだろうから、それはそれでいいのだろうけど、息子の彼は可哀想だった。

親戚をたらい回しにされ、2回目のお父さんが義父であり、その後、義理の妹ができ

たため、この叔父さんからも結構いじめられていたらしい。自分の血が繋がっていない子と自分の血のつながりのある子を対等に愛することは難しいのだろうか。

結局、その後、高校を卒業する頃に彼は心を病み、その後はずっと福祉に頼って生活をしていた。

今は福祉はしっかりしているらしくて生活には困らない。食べ物代や住むところは用意してくれるので、それなりの生活はしていたのだが、何せ40年近くも仕事もできない。家族もいない。一人暮らしである。何をするにも生きがいも持てない。そのため、彼は自暴自棄な生活をしていて、死ぬ間際には体重がなんと130キロだったとのことである。

うちの母のところにしょっちゅう電話をかけてきていたみたいなのだが、ある日電話がかかって、その2日後に亡くなったのだそうだ。

亡くなった原因は、お弁当を食べていて、それが喉につまったらしい。夜中に1人で死んでいったのだった。孤独死の87%は男だとある本に書かれていたと記憶している。男は悲しいのだ。なぜ、そのことを女はわかってくれない。俺はまた女性に対する怒りを増幅させるのだった。

おばさんは息子が死んだことで、「寂しい思いをさせてごめんなさいね」と泣いたりもしたみたいだが、いかんせん、もう頭が呆けた状態なので、そういう深刻に悲しむ状況が長くは続かない。また呆けた世界へと戻っていく。

人間って、本当に哀れで、せつなくて、悲しくて、滑稽で、愚かしい生き物なのである。

誰が悪いわけでもない。俺は、今クリスチャンになって、この世で起きることは全て修行期間だと思うようになってきた。この世はあくまでもリハーサル。天に昇った後にこそ、まっとうな世界が待っている。そうでも思わないことには、この世はあまりにも理不尽すぎる。

俺は自殺はしない。前に女優のジャンヌ・モローさんが、「神様はあなたに何かさせたいことがあるから生きさせてくれているのよ。だから苦しいことも含めて人生を愛するのよ」と言っていた。俺はまだ生きている。きっと神様が何か俺にさせたいと思っていることがあるのだろう。

しかし、これからどんどん可能性や残された時間は細っていくのである。その中で何を支えに俺は生きていくのだろうか。。。

4. マッチョな教え子たちとの交流

①二郎系ラーメン

1月、アメフト部の男子学生2人と二郎系ラーメンに行った。

実は2年ほど前にも、男子学生2人と二郎系に行っているのだが、あそこは俺の友人の話だと、二郎系とはいっても、エセ二郎系みたいな雰囲気のところなのだそうで、そのせいか昼時に行ったのに、店はすいていたし、その後その店はいつの間にか潰れてしまっていた。

しかし、今回行ったところは一乗寺の二郎系ラーメンの本家みたいなどころである。しかも、アメフトの子達と一緒に。マッチョ気分を味わおうと楽しみだった。

写真撮影は禁止と店の前に書かれている。お金はすべて自動販売機。そして店の中に

入るとカウンター席が 10 ぐらいしかない。いかにも一乗寺のラーメン屋という風情があった。綺麗な店とは言えないが、そこがいかにも場末の二郎系ラーメンらしかった。

二郎系ラーメンといえば、何よりも量が多いというイメージ。男子学生が大量に食べるお店というイメージがある。

俺はラーメンの量が半分のものを注文した。アメフトの子たちは、並盛り。とは言っても彼らも注文する前に躊躇していたのである。

「俺、半分にした方がいいかなあ」とか言っていた。

彼らは以前来たことはあるみたいなのだが、あまりたくさん食べる自信はないみたいなのだ。アメフトなのに！！

「僕ご飯だったらいっぱい食べるんですけど、ちょっとラーメンは・・・」とか話していた。

二郎系ラーメンは残すと怒られるとかあれこれ厳しいと聞いていたのだが、それはこの頃はないみたいだった。3 人で腰掛けて食べて、俺は量が少なかったからどうにかメンともやしと焼き豚は食べたが、汁は流石に全部は飲めない。

アメフトの 2 人も流石にもう食べるのがしんどいという顔をしていた。

京都は大学が多いからなのだろうが、二郎系ラーメンと限らず、量で勝負という店が非常に多い。普通の人だったら半分も食べれないくらいの量の食べ物が出てきたりする。なんか残飯が多くなるから食材の無駄遣いという気もするんだけど、そこが人気の一つの理由となっているんだと思う。学生からしてみれば、1 回はチャンレンジしたいという気持ちにもなるのだろうか。

二郎系ラーメンは、それほど美味しいと思うものではなかった。馬の餌を食べている気分だった。だけど、他の学生たちに聞いてみると、「その時はそう思うんだけど、また食べたくなるんですよ」とのこと。なるほどねー。

俺が去年教えていた元教え子なんかは週に 1 回は必ず二郎系に行って、インスタグラムにストーリーをあげている。彼に言わせれば、美味しいのだそうである。

人それぞれ味覚は違うなあと思ったりもしたのだった。

ラーメンを食べ終わった後、3 人で近くの和菓子屋さんでお菓子を食べた。二郎系ラーメンの後、和菓子だなんて可愛いものだ。

でも、俺、これでマッチョになったのかな？

今はアメフトの子でも性格的にはマッチョではないのだ。昔は体育会といえど上下関係が厳しくて、大変な世界だったはずだが、今はみんな可愛い。礼儀正しいし、優しいし、おしゃれで、お互いに何かあるごとに「ありがとう」とか言い合っている。

だからアメフトの子と一緒に親しく二郎系ラーメンを食べても、マッチョになった気分にはならないのだ。でも、仲間になれたみたいで楽しかった。俺は子供の頃から男の子集団に入れなかったトラウマが 60 過ぎた続いた今でも続いているのである。

②焼肉

次のマッチョ経験は島津スポーツアリーナだった。今回はボート部の子で、もうすぐ卒業する男子学生が一緒だった。

最初は琵琶湖のボート部の練習場で、2 人

で上裸になってトレーニングしようと言っていたのだが、ちょっと遠いと言うこともあって、近場となった。

中は比較的空いている。お客さんは近所の人らしくて、男の人ばかりだ。ここだったら、別に上裸になっても何も言われなさそうな気配なのだが、やはりやめておいた。

今は男性であってもそれが許されている場所でなければ、裸になるのは厳禁なのである。一緒に行った彼の話だと、他のスポーツジムで、更衣室で上半身裸になっていたら、その部屋の扉が開いていて、怒られたと言っていた。

男の裸が性的なものであるという共通認識は進歩である。素直に喜びたいと思う。

結局、上半身裸になって写真を撮ることはできなかったが、彼の前で上裸になって着替えた。彼の方はすでにジャージ姿で来ていたので着替える必要がなかったのだ。

俺の裸を見ながら、「うちのお父さんに比べれば、ちゃんとした体ですよ。うちはお腹が相当出ているから」と言われた。彼のお父さんは58歳なのだそうで、俺よりちょっとだけ若いけど、もうそういう体になってしまっているのだろう。

終わった後、どこかで昼飯を食べることになった。彼は千本の界限で下宿しているのだが、その近くの焼肉屋に行きたいという。

なぜ、なのか？若い男の子たちと食事に行くと、大抵の子は焼肉を食べたいという。フランス料理やイタリアンなどは誘っても、引いてしまう。彼らからすれば焼肉とかの方が気楽にたくさん食べれて、美味しい。

みんな遠慮もなくパクパク食べるのだった。ただ焼き肉の場合は夜食べると奢るの

が大変である。しかし、この時は昼だったから、大した額にはならなかった。

この時の男の子は、放送局に就職が決まったらしい。やはり体育系のやつは良いところに就職が決まる。羨ましい限りだ。彼は弟は慶応高校に行っていると言っていた。高校からエスカレーター式に大学まで行くらしい。お父さんも地方のマスコミ人とのことだった。

結構エリート系の家庭のお坊ちゃんなのだなあと思った。彼は屈託がないし、意地悪じゃない、いいやつだ。授業中もよく話してくれた。育ちがいいのだろう。

彼の話聞きながら、俺は2年前に東京の大手のテレビ局に就職した野球部の子のことも思い出していた。彼らはまだ20代。まだまだ前途洋々。長い人生、山あり谷あり。辛いことも多いだろうけど、たくさんの出会いや可能性に満ちている。

だけど、俺はもう先がない。人生100年とは言っても、70代の終わりぐらいで死ぬような人が多いような気がする。それに100年元気で現役で生きれる人なんてそうそういるものじゃない。60過ぎてからブレイクする人なんているだろうか。

これからはブレイクするなんてことは考えずに、地道に余生を生きていくしかないのだ。

5. 人生の先輩との食事

焼き肉の翌日だった。俺は2月19日に鼠蹊ヘルニアの手術を受けることになっているので、ちょっとあれこれ入院の準備のために病院に尋ねに行った。

帰り際、体が寒くてどうすることもでき

なくなった。家に帰って、早速眠ったがどうにも調子が悪い。熱を測ってみるとなんと39度を超えている。インフルエンザかもしれないと思った。早速、救急車を呼んだ。近所の市立病院に運んでくれた。

診断結果はコロナである。なんと初感染！！それから1週間くらいは熱が高くて大変な状況が続いた。

熱が冷めた頃、教会で一緒にいる、先輩の先生（70代後半くらいの男性）から、食事をご馳走したいからと言うメールが来た。

東山のわらじやというお店で、うなぎを食べることになったのだ。名店なのだそうである。

教会の聖歌隊はどんどん高齢化している。これはどこの教会でもそうなのだそうで、俺の通っている同志社教会でも、俺が一番若い部類なのである。

60にもなると、他のところでは最高齢になることが多いのに、教会だけは俺は若い人扱い。不思議なものである。

思えば、若い頃は、60過ぎの人は、70であっても80であっても90であってもみんな一緒くたにして考えていた。

60過ぎた人は皆年寄り。人生終わった人だと言う思いがどこかにあったのである。でも自分がその年になると、そう考えるのはあまりにも悲しい。

60代はまだ大丈夫だ。まだ若い。そう自分に言い聞かせるようになった。とは言うものの、これから何ができるのかなあ。これから待っているものは老いと病である。

この時、一緒にいた70代の先生は一回は癌でステージ4までいったのだそうである。しかし、生還なさって今はお元気だ。この先

生、なぜか俺に好感をもってくださっていて、奢ってもらうのは初めてではないのである。

人生の先輩と話をする、あれこれ勉強にはなる。これからの俺の人生の指針をあててくれる。とは言うものの、やはり年のいった先生と話をしていると病気の話などが多くなるのである。

実際、聖歌隊は存続の危機に陥っていて、癌が見つかった人が2人くらいいる。癌とはいってもこの頃は死ぬとは限らないし、お元気なのだが、70ぐらいになってくるといつだって死を意識して生きていかなくはなくなるのである。

転生を待つという悟りの境地に達することができればいいが、なかなかそうはいくまい。

死んだら魂はどこへ行くのか？深く考えると怖くなるのである。

この日はこの先生が高価な料理を奢ってくれた。そして、プレゼントまでくれた。これが不思議なプレゼントで、俺が不眠で悩んでいることを話していたので、心を落ち着かせるための、シューマン波発生装置という機械である。これが効果があるかどうかはわからないけれど、こういう贈り物をくれる人がいるというものは嬉しいものだ。

そして、高価な料理。先日は学生に二郎系ラーメンと焼肉を奢っているが、奢ったり、奢られたり。俺は学生に気前よく奢ってあげる方だが、その分、年上の先生からも相当美味しいものを奢ってもらっている。

そう考えてみれば、俺の人生は幸せだ。だけど若い子を見ると眩しい。一方で、お年寄りを見ると人生の最後に向けての終活の覚悟を固めなくてはという気持ちになる。

つくづく、俺もそういう年齢になってきたのだった。

6. 『リベンジ・マッチ』(ピーター・シーガル監督・2013 年)

「俺、M さんにビンタされたくて顔がうずうずしています。今度は俺の顔に手形の跡がくっきり赤く残るくらいビンタしてください」と俺はマッサージの M さんにラインする。

「手が痛いから嫌です」という返事が彼からくる。

とは言いながらも、彼は俺のところにマッサージに来ると、必ず俺のリクエスト通り、痛いビンタを喰らわしてくれる。

もう何回ビンタしてもらったかわからない。

痛い！バシッとビンタが飛んでくると痛いんだけど、「あー、これで俺も男になった」という快感に浸ることができる。

こういうと暴力を肯定しているように聞こえるかもしれないが、そうじゃないのだ。ビンタは男同士の友情の証なのだ。

彼とは友情で結ばれているからこそ、ビンタされても許せる。俺は M だから自分が誰かにビンタしたい、殴りたいとは思わないが、ビンタされるのは好きなのである。

でも、もう少し S にならなきゃいけないのかもしれない。

俺はボクシングジムで、なかなか相手の顔を殴ったりができないのである。

「俺、M だから人の顔を殴ったりはできないんだよ」

「殴り合うのがボクシングじゃないですか (笑)」と教え子から笑われる。

俺は殴られ屋。殴られ専門。そういえば、そういう映画あったなあ。確かチェ・ミンシク主演の韓国映画で『クライングフィスト』という映画。あの映画、大好きだった。もちろん、『ファイト・クラブ』も好きだった。

そして、最近になって、『リベンジ・マッチ』を再見中である。『ロッキー』で有名なシルベスタ・スタローンと『レイジング・ブル』でアカデミー賞主演男優賞受賞のロバート・デ・ニーロ。若い頃にボクサー役を演じた 2 人が、おじいちゃんになって、再びリングで戦うという話である。

やはり、男の心理の中には、歳を取っても、殴ったり殴られたりしたいという思いがどこかにあるらしい。

俺は結構、男なのだ。

そうそう、前に北大路欣也主演の『火まつり』という映画のなかで、「男がうずうずする」という台詞があった。あの映画すごく好きだ。おそらく、「男がうずうずする」という感覚は女にはわからない。

おそらく、「男の生理」みたいなものなんだろう。

上野千鶴子の本で『女という快楽』という本があったが、殴ったり殴られたりするのを楽しむのは『男という快楽』である。この快楽を保てるのはあと 5 年だろうか。10 年だろうか。15 年だろうか。とりあえず、もうそう長くはない。

若い男の子への羨望の思いと歳を取っていくのは仕方がないという諦念。両方に引き裂かれながら俺はこれから生きていくのだ。人間の人生って、何なのだろう？

それは死ぬまでわからないことなのかも。神様がくれた人間への宿題である。